

Hetubinduṭīkā, 論証因総説章について

乗 山 悟

[0] はじめに

「論証因総説章」とは Hetubindu (HB, ed. E. Steinkellner, 1967) 冒頭に掲げられた「綱領偈」に対する直接的な注釈部分である章（冒頭から 5*, 9 まで, E. Steinkellner 博士の翻訳の I 章にあたる）を指している。アルチャタによる HB への注釈 Hetubinduṭīkā (HBT, ed., S. Sanghavi & S. Jinavijayaji, 1949) は、後代のダルマキールティ注釈文献群中、サンスクリットテキストがまとまって現存するものとしては今のところもっとも古く文献的価値も高いが、pp. 1-56 がこの章に相当する。

上述の「綱領偈」とは周知の通り Pramāṇavārtikasvavṛtti の綱領偈と共有されたものであり、ダルマキールティの独創による論証因に対する定義を内容とする。綱領偈とは一般にその著作全体をまとめ上げるような性格を持つと考えることができる。それに従えば、HB は論証因に関する学説を簡潔に示す書名にふさわしく論証因の定義に対応する形で著書全体が構成されている筈である。同書が、たとえば Pramāṇavārtika (PV) や Pramāṇaviniścaya のような自己の学説全体を対象とするものではなく各論的な小編と見なされるのも、このような理由からして十分に納得のゆくものである。

一方 PV など、特に PV 第 2 章の研究の進展に伴って、ダルマキールティの思想の背景にある宗教的な問題の存在が明らかにされはじめてすでに久しい。たとえ HB が各論的な小書であるにしても、この種の問題についてまったく考慮がなされていないとは見なしがたい。本稿では、HB の骨格を示す論証因総説章に対するアルチャタの注釈を主な題材として、ドゥルヴェーカミシェラの複注 Hetubinduṭīkā-lola (see. HBT) も参照しながら、彼らが理解する HB の背景について若干の指摘を行いたい。

[1] アルチャタの帰敬偈 (HBT 1,5-16)

一般に帰敬偈とは論書などの最初にあつて、仏・菩薩に対する帰依敬礼ならびに造論の目的をのべるものである。HBT の帰敬偈も仏への帰依を述べるが、それとともに仏の徳性に関しても独自の記述をなしている。これを検討することにより彼による仏の位置づけを知ることができる。

悪習に耽ける一切衆生を救済する為に大いなる慈悲を生じた方であり、福德と知恵よりなる膨大な〔悟りへの〕要因を集めて倦むことなき方であり、学習すべきこと全てに及ぶ極めて無垢なる叡知の出る山を所持する方であり、世界の主人公たる月、勝利者たる太陽である方に頭をすりつけて私は礼拝をなす//1//

ダルマキールティ〔のことば〕が既に十分考察されているとしても、考察する。葡萄が潰潰されたとしても、味を落とすだろうか//2//

片や、その知恵が正理の道を計る世間の者¹⁾(＝ニャーヤ学徒?)に打ち勝った方の深遠なことばと、鈍才たる私には雲泥の差がある//3//

そうであっても、私にも幾ばくかの知恵は多少なりともある。これら〔の知恵あるが〕ゆえに、この『論拠一滴論』が私によっても説明されるのである//4//

[1] ドウルヴェーカミシエラの帰敬偈解釈 1

上記の帰敬偈の理解にはドウルヴェーカミシエラ注が有益である。彼は；

〔この偈は〕意図と修行の区別により2種の因となる状態を知らしめるだろう。自利と利他に存する区別により一対の果となる状態を知らしめるだろう²⁾。

と述べ、さらにこの偈頌が仏陀の修行の過程に対応することも明言している。これは Pramāṇasamuccaya 帰敬偈前半部分に対するディグナーガ自身の解釈と類似している。種々の優れた先行研究で指摘されたとおり、この半偈は仏陀がプラマーナであることを示しているとされ、仏陀の「原因の円満」(hetu-sampad) を 1) 「意図の円満」(āśaya-sampad), 2) 修行の円満 (prayoga-sampad) から示し、「結果の円満」(phala-sampad) を 3) 「自利の円満」(svārtha-sampad), 4) 「利他の円満」(parārtha-sampad) から示すとされる。周知のとおり 1)-4) の状態には仏陀の徳号が配置されている。しかしドウルヴェーカミシエラの説明はディグナーガの帰敬偈解釈を必ずしも忠実に踏襲してはいない。

故にこそ、ここで「(大いなる慈悲を)生じた…」などにて、最初に列挙された〔状態〕に関して、意図の状態を〔対応させる〕。その後、「福德と智慧よりなる…」などにて〔述べられた状態に関して〕修行の状態を、その後で「(学習すべきこと)すべてに…」などに

て〔述べられた状態に関して〕結果の状態を、そしてその直後に、「世界の...」などにて
〔述べられた状態に関して〕衆生利益の状態を〔対応させる。〕³⁾

まずディグナーガの徳号に関する記述がない。さらに、アルチャタの偈の中の
「大いなる慈悲を生じた方」が「i) 意図の状態」に、「福德と知恵よりなる膨大な
要因を集めて倦むことなき方」が「ii) 修行の状態」に、それぞれ相当するのは
ディグナーガの用語法に一致するとみてよいが、「自利の状態」となるべき箇所
が「iii) 結果の状態」(phalāvasthā) と言い換えられて、「全てに及ぶ極めて無垢な
叡知の出る山を所持する方」(＝一切知者) に対応させられており、「利他の状
態」も「iv) 衆生利益の状態」(sattvopakārāvasthā) に言い換えられて「世界の主
人公たる月、勝利者たる太陽である方」に対応させられている。

ドウルヴェーカミシェラによればさらに、i) と ii) とは別々にとかれている
が二つ併せて「因となる状態」とされる。

この修行ならびに〔それに〕先行する意図。この二つは、連鎖的に最高の地位の獲得の原
因である。故にただその地位の獲得の原因であることを表現せんとして、また実にただ状
態を表現せんとして、世尊の原因の状態が表示される。さらに区別を表現せんとして、意
図と修行の状態が〔表示される〕⁴⁾。

それぞれの状態は、世尊の場合は円満であるので、ここでの彼の理解によれば、
世尊には、ディグナーガが考える様に4つの円満ではなく、原因 (hetu) の円満と
結果 (phala) の円満と衆生利益 (sattvopakāra) の円満の三つの徳性が理解されてい
たといえる。

[3] 仏の三円満

ヴァスバンドウは Abhidharmakośabhāṣya (AKBh, ed., P. Pradhan, 1975), 第7章
において仏の十八不共法を論じているが、その中に諸仏の同異並びに仏の三徳を
説く節がある。そこでは如来に対する親愛・尊敬を生じる原因として、三種の円
満があげられている。

資糧と法身と衆生利益の行の点では、すべての仏陀は等しい。

〔しかし〕寿命と生まれと大きさの点では違う。(AKBh 7, k. 34)

三つの原因によってすべての仏陀は等しい。〔その三つとは〕すべての福德・智慧の資糧
を集積する点で、法身を完成する点で、そして世間の利益を行う点である。しかし寿命と
生まれと大きさによる違いが生じる。... (中略) そして、まさに以下の三種類の円満を思
惟する賢者によって、諸仏・世尊に対する深き親愛と尊敬が生ぜしめられ得る。すなわ

ち、因円満、果円満、利益円満を。このうち、因円満は4種類である。[つまり]すべての福德・智慧の資糧の修得、長時間にわたる修得、間断なき修得、恭しき修得である。果円満は4種類である。智の円満、断滅の円満、威神力の円満、色身の円満である。利益円満は4種類である。三悪趣と生死の苦しみ[の4種類]より完全に解脱せしめる円満、もしくは三乗と善趣[の4種類]に安住せしめる円満である⁵⁾。

この記述こそが三つの円満を説くドウルヴェーカミシエラの念頭にあったと考えられよう。なぜ素直にディグナーガの用語法の踏襲をなさなかったのかという問題は依然として残る。しかし当時仏陀をたたえる文句として AKBh の3つの円満を用いる伝統が主流であってディグナーガの枠組みといえどもこれに合わせて理解されていたとも考えられ得る。

これまでの記述をまとめてそれぞれの呼称などの対応関係を示すと、アルチャタの帰敬偈における「大いなる慈悲を生じた方」…①、福德と知恵よりなる膨大な要因を集めて倦むことなき方…②、全てに及ぶ極めて無垢なる叡知の出る山を所持する方…③、世界の主人公たる月、勝利者たる太陽である方…④は、ドウルヴェーカミシエラ1の場合、①意図の状態、②修行の状態、③結果の状態、④衆生利益の状態と対応し、ドウルヴェーカミシエラ2の場合、①+②原因の状態、③結果の状態、④衆生利益の状態となる。またヴァスバンドゥについては①+②因円満、③果円満、④利益円満となり、ディグナーガは、①意図の円満、②修行の円満、③自利の円満、④利他の円満、となる。従ってディグナーガの四円満については、最初の二つが、AKBh の「因円満」に相当し、後は順次「自利の円満」が「果円満」、「利他の円満」が「利益円満」に当てはまることとなる。無論これはアルチャタ＝ドウルヴェーカミシエラの解釈であり、実際のディグナーガの意図がどの様であったのかについてはさらに検討を要するであろう。

[4] ドウルヴェーカミシエラの帰敬偈理解 2

ドウルヴェーカミシエラによれば、この偈の存在はアルチャタの仏陀観の披瀝にとどまらず、別の意図も持っている。

仏のことば (pravacana) の清浄により、それ [=ダルマキールティの文章] の清浄がある。なぜならば、仏のことばの意味の熟考を専らとするから、師 [=ダルマキールティ] の論書はそれを唯一としている故に。そして故に師の論書の清浄の基盤である仏のことばの清浄をさとらせるために世尊の徳の出ることと過失の無いことを帰敬を示すことによって [アルチャタは] 教示する。方便を示現することを前提とするかくのごとき「叡知の出

る山に属する方」 と言表によって世尊のすべての無知の消滅が教示された⁶⁾。

ドゥルヴェーカミシェラによればこの帰敬偈は仏のことが正しいことを示す働きもあり、それがひいてはダルマキールティのことが正しいことを示すことにもなるのである。徳の円満に基づく仏陀の言葉の正しさを離れてダルマキールティ（ひいてはアルチャタ）の言葉の正しさもあり得ないという意識の表明が論書の冒頭で表されていることをその後の論証因説を読解するにあたっても常に念頭におかねばならないと考えられる。

[5] 想起論の位置づけ

論証因總説章には付論として想起に関する記述が挿入されている。ダルマキールティの知識論における想起の果たす役割の重要性は明白である。にもかかわらず想起がプラマーナではないことも同時に強調されるところである。ここの文脈では効用に区別がないことを根拠にして同一物に対する連続した直接知覚も想起の様にプラマーナではないという反論が紹介され、ダルマキールティは一般的にはこれを認めながらも、連続した直接知覚が「多種多様な効率を発揮する」場合があると返答している⁷⁾。この場合に相当する具体的な認識についてアルチャタは次のように説明する。

後続する[諸感官知]がプラマーナではない過失とはならない。なぜかといえば、「種々多様な効率を発揮するからである。」すなわち、対象の断定を特徴とする取得とその効果的作用の実行を特徴とし、保持を性質とする保証が、刹那ごとに識別される。故に、異類例に[効用を同じくするという論証因が]存在することがないから、不定因ではない。

いつ、種々多様な効率を発揮するのか？

「特定の瞬間によって達成される目的を望むとき」にである。

[つまり]特定の瞬間によって達成される、有益/無益という特徴の目的に対して或る特定のものが、或る特定の仕方で、或る特定のものに対する効用を持つので、ヨーガ行者に獲得/排除への希求という欲望が他者の利益に関して生じる時に、である。

たとえば、見道において[欲界に束縛された]苦に対して、法の知をもたらす認識(苦法智忍)は、十の⁸⁾ 随眠の習慣(習気)を絶つ。それと矛盾したよりどころを生じる故に⁹⁾。苦に対する法の知が、煩惱から分離した特徴を有する涅槃の獲得(離繫得=解脱道)を生む。随眠と矛盾したよりどころの安定を生じる故に。

故に、それら [=他人の苦法智忍/苦法智] を把握する他心智(他人の心を知る智慧)は、[前の刹那とは]まさに別個にプラマーナである。そして他者を利益せんとする献身

を有し、普く実在物に広く遍満する智慧の光明によって照らされし内なる本性を持たれる世尊たちにとって、或る対象の瞬間だけがある他者の目的のみに貢献するか、障害をなすものである。というように、すべての存在を刹那ごとに観察しつつある直接知覚で認識する者たちにとっては、その対象の諸刹那が相異なった目的の達成について有用である点で種々の効率を有する故に、そしてもし刹那ごとに、刹那の区別を見る人 [= ヨーガ行者/世尊] に関して述べられるとすれば、そのとき、相異なった効用を持つ点でそれぞれにブラマーナであるから、不安ではない。さてもし、すべての諸物が一つであると執着する世間的な行動をする人物を意図して言われたとすれば、[彼らは] 青の [時間的] 連続体まるごとを恒常なる性質をもった単一の対象 (もしくは事物) と [判断し]、かつ、それによって実現されるべき目的の達成 (= 効果的作用) を単一の本性をもつものと判断 (= 執着) する。故に後続のものたちがブラマーナであることも決して認められない¹⁰⁾。

AKBh 第 6 章における見道に関する記述を「多種多様な効用をもたらす認識」の説明の教理的背景としてあげることができる¹¹⁾。仏教の修道論上の諸認識に関してアルチャタは深い理解を有していた。そして、そのような修道論的認識に対する重大な関心こそが、ここでなされたような想起とブラマーナとの峻別を強調する動機になったと思われる。このことは同時に、彼にとって HB が単なる論証因説の手引き書ではなく、修道論的背景も考慮しながら読解すべき著作であったことを示している。

-
- 1) 「世間の者」については Pramāṇasamuccaya III k. 8d-9ab でも述べられている。北川秀則『インド古典論理学の研究—陳那 (Dignāga) の体系』p. 270f. を参照。 2) HBTA 233, 10f. 3) HBTA 233, 16f. 4) HBTA 234, 17f. 5) AKBh 415, 12f. 6) HBTA 235, 20f. 7) cf. HB 3*17-4*2 8) damānām を HBTA 291, 3 により daśānām と訂正する。 9) āśaya をチベット訳により āśraya にあらためる。 10) HBT 37, 6f. 11) AKBh 第 6 章については、櫻部建・小谷信千代『俱舎論の原典解明 賢聖品』1999 を参照。

付記：本稿の学会発表（龍谷大学）にあたり貴重なご意見を頂戴した桂紹隆、武田宏道および護山真也各先生のご厚意に感謝いたします。

〈日本私立学校振興・共済事業団 平成 11 年度学術研究振興資金による成果の一部〉

〈キーワード〉 Hetubinduṭīkā, 帰敬偈, 想起

(龍谷大学兼任講師)